

## 定 年 雑 感

### はじめに

13年間の院長生活を、長年にわたりご支援・ご指導くださいました皆様方に感謝申し上げます。

旧筋ジス病棟の新築が任期中に実現できなかったことに対しては、期待して待ち望んでいた多くの患者さんに心よりお詫びを申し上げます。

### 光陰矢のごとし

戦後の混乱期。貧困にあえぐ沖縄の片田舎。警察官であった父親の殉職（私が3歳）。当時の沖縄の田舎は電気は無く、ランプでの生活。貧しくても、暗さは全くなかった。

国費国内留学制度が無ければ進学できる経済状況にはなかった。田舎の山猿が、大学紛争に巻き込まれた。政治、経済、哲学。医学とは無縁の大学生活をおくる。

### 良き師に恵まれる

岡山大学医学部第一外科は徒弟制度そのものの医局。不勉強の、できの悪い息子ほど、かわいがってもらった。琉球大学保健学科付属病院においても良き師に恵まれた。

### 国立療養所沖縄病院

医師の絶対数の不足した時代であった。呼吸器外科は結核の外科から肺がんの外科への移行期。断層撮影からCTへ、気管支造影が不要となり、電子ファイバースコープが駆使され、後側方開胸から胸腔鏡の時代へと変遷。

減少する結核対策に結核病床を種別変更し神経難病病床を開設。

### 国立病院機構沖縄病院

ISOによる職員の意識改革。外来化学療法室・緩和ケア病棟の開設。一般病床の「がん専門病棟」への種別変更。フィルムが姿を消し、紙の時代から電子カルテへ。大型医療機器の更新。地域連携室・理学療法室の強化。

医局員と他部門との良好な連携がPDCAサイクルの回転を加速する。

### 重粒子線施設と沖縄

肺がんが重粒子線治療の最大のターゲットとなるため、近接する琉球大学との連携で重粒子線治療施設の誘致を望んだ。政局とからめた重粒子線治療施設は、いかようなものになるのだろうか。

青い海は沖縄の宝である。基地関連交付金頼みの政治から、自立への道を探らなければならぬ。

### 国立病院機構

「償還計画」のブレーキのみでは展望が開けない。個々の施設が、個々の課題を抱えて

いる。時宜を得た飛躍の機会を逃してはならない。機構全体として各施設の基礎体力の増強にてこ入れをしなければならない。各施設の長所を生かし、短所の改善・改革を図る。しかも地域医療との関わりの中で。

#### 「夢」そして展望

国立病院機構琉球病院との連携。「心療内科」を開設。琉球病院にとっては、都市型精神疾患への参入、沖縄病院にとっては緩和ケアの充実を図る。ハンセン療養所の生活習慣病対策を担う総合診療部門の充実を図る。

脳神経外科を開設し、付属「神経・筋センター」の設立を夢に見たこともあった。再度、検討に値するものと考えたい。

放射線治療施設の乱立は、離島県には好ましくない。「サイバーナイフ」を導入し、I期肺がんの治療と転移性脳腫瘍の治療に新たな展開を図り、放射線治療センター構想も有意義である。

重粒子線施設誘致の当院への誘致は挫折した。空き地を有効に活用し、「メディカルプラザ国立病院機構沖縄医療センター」の建設。外部資金を導入して建物を建設し、生活習慣病に対応したクリニックの入居参入をうながし病院街となす。最新の大型医療機器の共同有効利用により、ランニングコストを最小限に抑えた効率的な医療を展開し、地域医療に貢献する道を探るのも一つの方向性。

#### むすびに

結核を含む「呼吸器センター」、筋ジスを含む「神経・筋センター」、肺がんを含む「がんセンター」の3本の診療の柱を堅持しつつ、もう1本の柱を模索したい。沖縄の地域医療の充実のために貢献するとともに、近接する琉球大学との連携により臨床研究の活性化を図り、全国に発信できる業績の蓄積を期待したい。

(沖縄病院広報誌 はいさい31号 2014年5月15日)